昭和初期の住宅における建築と庭園 ： 西川友孝『造庭建築』を中心に

著者	田中 栄治
雑誌名	神戸山手大学紀要
号	16
ページ	19-36
発行年	2014-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000651/

昭和初期の住宅における建築と庭園

―― 西川友孝『造庭建築』を中心に ――

The architecture and garden in the houses during the beginning of Showa era: Nishikawa Tomotaka “The Gardener of Build”

田　中　栄　治

キーワード：住宅、庭園、昭和初期、建築家、造園家

要　旨

大正期に生活改良のための住宅改造や庭園改造が議論されるようになると、そのなかで住宅における建築と庭園の連繋、住宅設計における建築家と造園家の連繋が重要視されるようになる。造園家西川友孝が編集した『造庭建築』を中心に、大正から昭和初期の建築家や造園家の言説を考察すると、住宅における建築と庭園の連繋については建築関係者と造園関係者の意見は同様であったが、住宅設計における建築家と造園家の連繋についてはそれぞれの意見に違いがみられた。

1．はじめに

大正期に生活改良のための住宅改造が議論されるようになると、造園家たちも生活改良のための庭園改造の必要性を主張しはじめ、日本の伝統的な住宅にみられる「自然との融和」を見直しつつ、庭園の役割を旧来の「接客本位」「観賞本位」なものから「家族本位」「実用本位」なものにすべきであるという提言が行われるようになった。さらに、庭園を「戸外の室」として住宅と庭園とをひとつづきの空間としてとらえる考え方から昭和初期には建築家と造園家の連繋が重要視されるようになった（田中 2012）。では、昭和初期における建築家と造園家の関係はどのようなものであったのか、1936（昭和11）年発行の『造庭建築』（写真１）を中心とし、関係する文献に書かれた建築家や造園家の言説から考察する。

写真１　『造庭建築』西川友孝
1936（昭和11）年

２．『造庭建築』

『造庭建築』は造園家西川友孝（1906～1985年）の編集により、1936（昭和11）年１月10日に大阪市東区博労町二丁目にあった巧人社から発行された。西川友孝は1928（昭和３）年３月に東京高等造園学校（のちの東京農業大学地域環境科学部造園科学科）を卒業したのち、林学博士上原敬二が運営していた上原造園研究所に務め、その傍ら七曜社建築造園事務所を共同経営していた。この頃、上原造園研究所の先輩に吉村巌がいた。また、東京高等造園学校で講師をし、『庭園工藝と室内装飾』『近代的な小住宅』『工藝美術』など多数の著書がある。さらに、1931（昭和６）年から1932（昭和７）年にかけて雑誌『建築・造園・工藝』の編集を行った。戦後には、1964（昭和39）年に「造園設計事務所連合」（Landscape Architects office in Japan）が結成された時のメンバーのひとりでもある。なお、商工省工芸指導所意匠部長などをつとめたインダストリアルデザイナーの西川友武は彼の２才上の兄である。

西川友孝は『造庭建築』の序においてまず以下のように書いている。

> 建築と造園とが由來密接不可離の關係にあることは、今更言ふまでもないことである。〔…中略…〕／現代にあつては、建築と造園との關渉は一層密接の度を加へ、建築家はその研究の領域を造園にまで延長し、造園家も亦建築の分野に歩を進めつつある。／卽ち、一つの住宅を例にとつてみるも、住宅と庭園とが建築家と造園家との提携、協力によつてなされてこそ、初めて眞の住生活地が實現されるわけである（西川 1936 序）

ここで、「建築家はその研究の領域を造園にまで延長」とあるのは、昭和はじめ頃から建築家が建築や住宅の雑誌に庭園の記事を発表するようになったという状況を書いていると考えられる（田中 2012）。また、「造園家も亦建築の分野に歩を進めつつある」とあるのは、大正期中頃から造園家が住宅は庭園と一体的に設計されるべきと主張し、上原敬二『住宅と庭園の設計』（大正８年）、大屋靈城『庭本位の小住宅』（大正13年）、西川友孝『近代的な小住宅』（昭和５年、のち昭和11年に『近代的な住宅と小庭園』として再版）、西田富三郎『新時代の庭園と住宅』（昭和９年）などの造園家が住宅の設計まで踏み込んだ本が発行されたという状況を書いていると考えられる（田中 2013）。

また、西川はこの本の目的を以下のように書いている。

> 建築と造園－この二つは餘りにも密接な關係に置かれてゐる。にも拘らず、これを連繫せしむることを等閑に附してゐたかの感がある。從來、數多くの建築書、造園書は刊行されたが、建築と造園との不可離なる關係を強調し、二つの造型藝

術を對蹠的に提示せる書はなかつた。／茲に、本書は建築、造園界の權威者數十氏の執筆により、眞に理論的にも技術的にも二つの新しき造型藝術の眞随を傳へ、同時にこれが提携、協力すべきものたることを明確に示さんとして編纂されたものである。／その内容は建築、造園の各部内に亘り、その所説は盡く最新の研究であり、斯界將來の動向を明示するものと信ずる（西川 1936 序）

ここでは、昭和はじめ頃から建築家と造園家の連繋が重要視されるようになっていたが、現実には連繋が実現していなかったことを示している。この本では、その重要性を改めて明確にすることを目的としていることがわかる。さらに、「本書の使命は建築、造園に對する興味をより大衆化、普及せんとすることにある」（西川 1936 序）とし、建築や造園の専門家はもちろん、一般芸術に携わる人々、並びにその他の人々に読まれることを想定している。なお、この本に収録されている文章は、雑誌『建築・造園・工藝』に掲載されたものを新しく編纂したものである。

では、『造庭建築』にはどのような文章が収録されているのか、執筆者の専門分野別に列記すると以下の通りである。

＜造園関係＞
重森三玲「日本庭園における様式の研究」
　　「日本庭園に於ける技術の動向」
永見健一「クライン・ガルテンの沿革及クライン・ガルテン法の研究」
　　「公園敷地取得に關する二三の法制に就て」
上原敬二「住居庭園に於ける諸問題」
西川友孝「佛蘭西造園の構成様式」
　　「水景に關する技術」
水谷駿一「造園技術の擴大と動向」
　　「造園材料の將來」
杉本文雄「日本庭園に於ける石燈籠に就て」
平山勝藏「庭園に於ける敷砂法」
吉村　巖「岩石園の基本構造に就て」
田阪美徳「野球場計畫に就いて」
西島樂峰「都市に於ける園藝」

＜建築関係＞
竹内芳太郎「庭園の社會性」
藤島亥治郎「新日本建築の黎明」
藏田周忠「住居建築の根本の問題」
川喜田煉七郎「巴里の「ヴォアザン」計畫」
「獨逸に於ける「小農村住宅」平面の研究」
市浦　健「新らしき建築様式に就いて」
「住生活の新形式」
木村幸一郎「新住宅建築への道」
杉山豊桔「視覺上の現代建築」

＜美術関係＞
税所篤二「現代住宅に於ける繪畫要素」
「現代フランス住宅の傾向」

18人の執筆者による25編の文章が収録されているが、編集者が造園家であることから、造園関係者の文章が多くなっている。また、建築関係者の文章は新しい建築様式を求めるものや、海外の新しい考え方を伝えるものが多いのに対して、造園関係者の文章はより具体的で詳細な実務に直接関わるものが多いことがわかる。このことから、西川友孝が『造庭建築』を編纂した目的は建築家と造園家が提携、協力すべきものであることを明確に示すことにあるとしているのに対して、両者に意識の違いがあるのではないかという疑問が生じてくる。

そこで、これらの文章の中からいくつかを取り上げ、さらにそれぞれの建築家あるいは造園家が書いたその他の文献を取り上げることにより、昭和初期の住宅における建築と庭園、および住宅設計における建築家と造園家の関係について考察していく。

３．造園関係者の言説

３－１．上原敬二

上原敬二は、1914年（大正３年）東京帝国大学農学部林学科を卒業した後、同大大学院へ進学し、神社林の研究で林学博士を取得した。造園学研究のための欧米留学を経た後、1918年（大正７年）上原造園研究所を設立した。関東大震災の翌年の1924年（大正13年）に東京高等造園学校を設立、造園学を確立し、造園技術を教授した。東京高等造園学校は後に東京農業大学となり、上原は1953年（昭和28年）に東京農業大学教授となる。『住宅と庭園の設計』（1919）、『庭園学概論』（1923）、『和洋風庭園の作り方』（1929）、『日本人の生活と庭園』（1942）など多数の著書がある。

上原は『造庭建築』に「住居庭園に於ける諸問題」と題する文章を掲載し、「住居庭園の問題に關しては從來、建築家、造園家、園藝家等より種々なる意見が發表されて居る」（上原 1936 p.39）とし、「今後の庭園は何物の支配を受け、又受けざるを得ないか、さうして如何なる方面の智識を求めるに急でなければならぬのかその一つは廣義の意味にいふ建築であり、工藝である」（上原 1936 p.45）としている。特に、住宅庭園について以下のように書いている。

> 今日の建築殊に住宅の發達に對して、その新説が續々として發表せられ、又それに對して專門家又は世人は賛否相半ばして居る樣である。我々はその新説を如何なる點まで信憑し得るや、素より專門違ひではあるが、然し駸々として進歩してゐる物質文明の餘澤が一にも二にもその新説の根源をなして居ることは到底否むことは出來ない（上原 1936 p.45）

大正期にはじまった生活改良の動きに対して、まずは住宅改造の議論が起こり、それに続くように庭園改造の動きが出てくるようになった（田中 2012）。ここでは、続々と発表される住宅改造の議論について、専門家からも賛否両方の意見が出ていたことがわかる。そして、庭園改造の立場からはそれらの新説に対してどこまで信頼することができるかという問題はあるが、住宅改造の議論の根本に物質文明の進歩があるという点において、庭園もその進歩に遅れないように新しい展開が必要であろうという考えがうかがえる。その上で、上原は住宅と庭園との連繋に言及する。

> 住居庭園である限りどうしても建築たる住宅の仲介なくしては、新文化への握手は望み得ない、この點に於て庭園も亦廣き意味よりの建築なりと云ふことは否定が出來ない〔…中略…〕住宅と庭園との連繋といふ側より見た庭園の發達に就いては、最も眞摯たる態度を以て建築の發達と相應じなければならない
>
> （上原 1936 pp.45-47）

ここで、住宅の庭園に限れば、建築の存在なしには庭園の発展は考えられないとして、住宅改造の進展に対して庭園も対応しなければならないとしている。上原は、住宅と庭園との連繋を実現するためには建築家と造園家の連繋が重要であるとしている。

> 造園家は建築家と相提携して進まねばならぬといふ意味はここであつて、住宅の意味より、その位置の判定、延いては樹林の配置陽光の調節等に亙っては住宅建築以前に建築家は造園家の意見を問ふべきである〔…中略…〕それ等を協調して行く處に眞に住居の本然の姿が實現し得るわけであると信ずる（上原 1936 p.47）

ここでは、住宅の設計では最初に住宅の配置や植栽の位置、日射の調整等について充分検討することが必要であるとし、建築家は住宅の設計をはじめる前に造園家の意見を聞くべきであるとしている。これは、庭園に住宅を設計するための最初の手がかりという役割があるとする大屋靈城の『庭本位の小住宅』における考え方と同じである（田中 2013）。

上原のこのような考え方をより詳しくみるために、『造庭建築』以前の上原の著書『住宅と庭園の設計』（写真２）における記述を確認しておく。『住宅と庭園の設計』は『造庭建築』の17年前、1919（大正８）年８月17日に発行された。この本の緒言で上原は「本書に筆を執った由來は専門上の問題を離れ自分の經驗した事を基とし一般中流階級を標準として其生活に準據し〔…中略…〕住宅と庭園とを通じて設計者の根本として心得ふべき事柄を挙げたのが主目的である」（上原 1919 緒言 pp. 3-7）としている。造園家が専門外であるとしながら、住宅の設計にまで踏み込んで記述するようになるのはこの頃からであると考えられる。この本の中で上原は「庭園に於て住宅と相關聯し個人生活の此の範圍に於て造園家と建築家は密接な理解を有しなければならぬ」（上原 1919 pp.6-7）とし、造園家と建築家の連繋の重要性について指摘している。その上で、住宅と庭園の関係については「住宅として庭園の添はないのは住居として完全とは謂へない」（上原 1919 p. 17）としながら、「建物の方は住宅建築と謂はれてどんどん新しい型を作って進んで行くのに庭の方は一向進まない」（上原 1919 p.21）とし、当時の住宅改造の動きに庭園改造が対応できていなかったことがわかる。さらに、上原は造園家たちに発奮を促す。

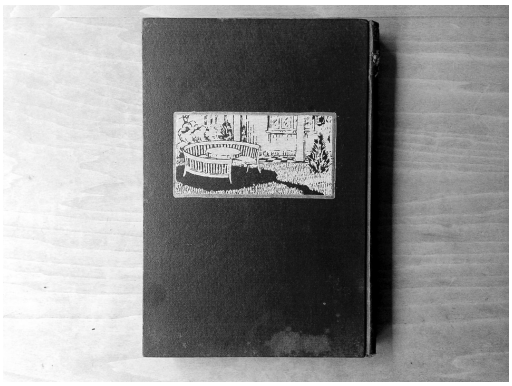

写真２　『住宅と庭園の設計』上原敬二 1919（大正８）年

> 近來個人生活の問題が深刻に考えられて來た時世には住宅にも色々な近代建築が應用され海外からは新しい設計意匠に参考となる住宅研究の書物が盛んに輸入されて來た。庭園の方も常によく考えて之れと想應する様に造り出されなければならぬ。何時でも息を切つて建築の進歩の後を追ひかけて居る有様では何の餘裕もなく到底良い考案は浮びさうにも見えない。時には一思ひに建築の進歩を追ひ越し彼等に魁して時代に適應した新しい庭を作り茲に建築の進歩を待ち受ける位の發奮が欲しいと思ふ。正に庭園設計家の遠大なる覺悟に俟たなければならない
>
> （上原 1919 p.22）

しかし、上原の発奮の甲斐もなく、17年後の『造庭建築』においても建築家と造園家の連繋は実現していなかったことがわかる。

３－２．西川友孝

『造庭建築』の編集者である西川友孝は本書の中に「佛蘭西造園の構成様式」「水景に關する技術」の２つの文章を収録しているが、これらは庭園のより具体的な構成や技術に関する記述であり、西川の主張はむしろ先に挙げた序文の中にみることができる。建築家と造園家が提携、協力すべきものであることを明確にすることが『造庭建築』を編集した目的であった。この考え方をより詳しくみるために、当時の西川の他の著書の記述を確認する。

『庭園工藝と室内装飾』（写真３）は、『造庭建築』の７年前、1929（昭和４）年８月20日に発行された。西川友孝が23歳の時であり、上原敬二が校長を務めていた東京高等造園学校を卒業した次の年である。この本の序文は西川の師である上原敬二が担当している。序詞で西川は、「室内を氣持ちよく飾ることが住生活にとつて趣味ある仕事であると同様庭園を飾ることも亦私達の生活を樂しくしてくれるものです。／私達は、室内と庭園、この二つを離すことなく、美しい住生活地を建設するやう努めやうではありませんか」（西川 1929 序 p.3）と書いている。そのために西川は「庭園工藝」「室内装飾」に着目している。ここで、「庭園工芸」とは西川が「今迄にありました「庭園建築」「庭園添景物」「庭園家具」等を總稱して私が名づけた新らしい言葉」（西川 1929 p.5）であり、「庭園内にあつて工藝的價値を發揮すべき人工的な作品及び庭園的に取扱はれる工藝品」（西川 1929 p.7）を指している。それは、それまでの「庭園建築」「庭園添景物」「庭園家具」等はそれぞれ限られた意味しか持っていなかったのに対して、もう少し大きく庭園に関する建築、工作物、工芸品全てを含んだ言葉として捉えられている。この本の後の章では、「庭園工藝」として、門、柵囲と垣根、階段と露壇、縁廊、庭亭、飾鉢、室内庭園、庭園家具、庭園照明、芝生と花壇、庭泉、プール、橋、彫塑と彫像、日時計、鳥の家と水飲盤、遊戯器具と物干場などを挙げている。その上で、西川は「庭園工藝」の役割について以下のように書いている。

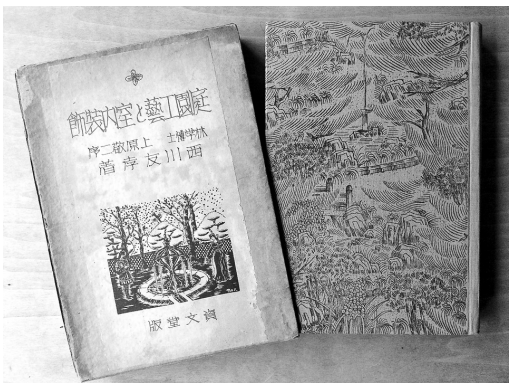

写真３　『庭園工藝と室内装飾』西川友孝 1929（昭和４）年

> 私達は住生活の理想として、庭園と住宅とが一つに融合され、住宅が「室内生活地」であれば庭園は「室外生活地」であることを望んでおります。／ですから、庭園と住宅との連絡は、今迄より以上に、安易に、滑らかに、何の溝もなく行は

れねばなりません〔…中略…〕庭園と居間とはもつともつと接觸し、室内から庭園へ、そして庭園から室内への間に、一寸の溝もあつてはならないのです。室内での生活の延長が庭園へと、向はねばなりません〔…中略…〕そういつた住生活の樂しみを味わふには、室内と庭園との間に、溝があつてはならないわけでせう。そして、この溝を除くために大變役立つてくれるものが「庭園工藝」の數々なのです（西川 1929 pp.7-8）

ここでも、室内での生活が庭園へと延長するような住宅と庭園の連続した一体的な利用を目指しており、そのために「庭園工藝」が役立つとしている点が特徴である。そして、「庭園工藝」は「建築に附随するものでもなく、又獨立に發展するものでもなく、室内の慰安である「室内装飾」と手を結んで、出來る限り自由に、それぞれの部所に、ゆとりと暖か味、そして親しみとを輿へるやうなものでなければならないと思ひます」（西川 1929 p.15）とし、「庭園工藝」と「室内装飾」が調和していることが庭園と住宅との連絡をより安易に、滑らかにすると考えている。なお、「室内装飾」としては、扉、壁面、窓飾、家具、装飾画と壁掛、敷物、照明、色彩などを挙げている。

さらに、西川は1930（昭和５）年４月18日発行の『近代的な小住宅』（写真４）においても住宅と庭園の関係に触れ、「私達の住生活といふものは、住宅と庭園の二つのものから成り立つてゐるものです」（西川 1930 p.15）としている。さらに、西川は建築家と造園家の関係についても以下のように書いている。

写真４　『近代的な小住宅』西川友孝 1930（昭和５）年

建築家にしろ、造園家にしろ、共に私達の住生活の根據地を設計するわけですから。徒に機械的に或は数理的に、住宅と庭園を結びつけて了ふことはよくないことです。／建築家と造園家とは、互いに手を取り合つて、完全な「人間の住家」を作るべきです。〔…中略…〕ここで、私は近代的な小住宅－とは住居の爲の建築と庭園によつて作られるものだ。といふ定義を下したいと思ふのです。／言ひ換へるならば、室内生活地が「住宅」であり、室外生活地が「庭園」であるといふことになります

（西川 1930 pp.15-16）

ここで西川は本のタイトルでもある「近代的な小住宅」が建築と庭園の連繋によりつくられるとし、そのためには建築家と造園家の連繋が必要だとしている。さらに、住宅プランと庭園プランを比較し、各要素の関係を示している。

＜住宅プラン＞		＜庭園プラン＞
外柵	－	外庭
玄関	－	門庭前庭
客間居間	－	主庭
子ども室	－	児童庭
食堂休養室	－	芝生地
台所	－	実用園勝手廻り
ポーチテレス	－	パーゴラ
廊下	－	園路
書斎	－	書斎の庭

これにより、住宅と庭園との利用には優劣がないことを示し、「小住宅には小庭園を…」というのを近代的な小住宅の理想としている。また、「小住宅」の定義としては「土地を最も集約的に利用した住宅」としている。西川の主張は、単に住宅と庭園の連続した一体的な利用を目指すだけではなく、新しい近代的な住宅の実現のためには建築と庭園の連繋、建築家と造園家の連繋が必要であるとしている点が重要である。

３－３．西田富三郎

さらにもうひとり、『造庭建築』には執筆していないが、造園家の西田富三郎の文章をみておく。西田は、1934（昭和９）年６月10日に大阪の太陽社書店から発行された『新時代の住宅と庭園』（写真５）のなかで「明るい快適な郊外生活を渇仰せる現代都人士のために、新らしい住宅―住家と庭園―の設計方法を如實に説明した」（西田 1934 執筆を了りて）とし、特に以下の点から説明していると強調している。

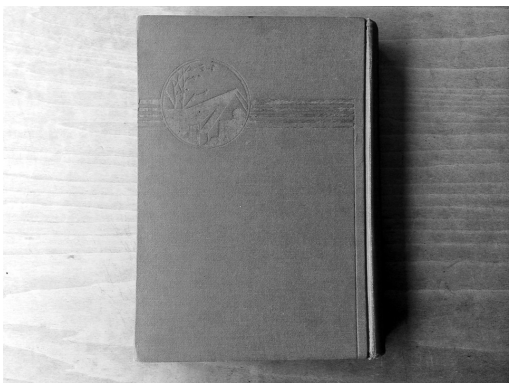

写真５　『新時代の住宅と庭園』西田富三郎 1934（昭和９）年

①造園上の見地より郊外住宅地や敷地を批判研究
②環境に対する造園的な利用法
③敷地内における住家の配置法
④住家と庭園との機能上の統一と様式上の調和法
⑤現代風な庭園設計法

ここでは、造園の視点から住宅と庭園の連繋の必要性を説いている。特に雑誌『住宅』1933（昭和８）年４月号に掲載された記事を再掲載した文章である「家と庭とを如何して連絡さすか？」のなかで、「庭園と住宅とは同一人の手でデザインすることが理想でもあり又原則でもある」（西田 1934 p.260）とし、住宅と庭園の連繋を実現するためには住宅と庭園を同じ人が設計することが必要であるとしている。

> かくして兩者は此處に一丸となつて、住生活に對する有機的な作用を開始するに到るものである。即ち、様式上の調和は住宅の外觀を統一せしめ、有機的な連絡は其實用的價値を愈々強調せしむるに到るものである。〔…中略…〕此兩者の中間に介在して、調和や連絡の役目を有する造園的連絡物（或は建築的連絡物）の種類や用途や造附場所等に就て、簡単な造園的紹介を試みて置く
>
> （西田 1934 p.260）

この後西田は、住宅と庭園とを連絡させるものとして以下のものを挙げて説明している。

①洋風：ポーチ、テレス、パーゴラ、トレリス、階段、窓庭、壁泉、庭壁
②和風：縁側、踏脱石、袖垣、手洗鉢、藤棚、捨石、石積

西田は、住宅と庭園の有機的な連絡のためにはこれらの造園的、あるいは建築的な連絡物が重要な役目を担っているとしている。

以上、昭和初期の造園関係者の本や記事から、住宅における建築と庭園の連繋、住宅設計における建築家と造園家の連繋についての言説をみてきた。この頃の造園関係者の言説には、住宅における建築と庭園の連続した一体的な利用を目指すものが多くみられ、そのためには建築家と造園家の提携、協力が必要であるとしている。さらに、それにより新しい近代的な住宅が実現できるとしているものがみられた。

４．建築関係者の言説

４－１．竹内芳太郎

竹内芳太郎（1897～1987年）は、早稲田大学工学部建築学科で今和次郎に師事し、卒業後も今とともに民家や農村建築の研究を続けた。1936（昭和11）年には同潤会技師として東北地方農山漁村住宅改善調査の実務を担当し、農村住宅標準設計案などの提案を行った。第二次大戦後は農林省農業技術研究所農村生活科住居研究室長、東京教育大学農学部総合農学科教授、中部工業大学建築学科教授、文化庁文化財保護審議会専門委員などを歴任した。1959（昭和34）年に日本建築学会賞（業績）、1967（昭和42）年に勲四等瑞宝章を授与された。

竹内は『造庭建築』に「庭園の社會性」と題する文章を掲載し、まず当時の造園界の状況を以下のように書いている。

> 今日吾々が庭園と言ひ庭園として指示さるるものは何か。多くの造園家は一度口を開けば前時代の遺物を以て造園藝術の最高峰として讃美の聲を發し、ひたすらに己に終末を告げたる社會及び階級の所産たる舊庭園の内に觀念的な手法を探り之が模倣踏襲を以て自己の技術的立場を擁護せんとし、先人の袖にかくれて逃避をのみ事としてゐる。／之が現在の造園界の大勢であると私には考へられる
>
> （竹内 1936 p.52）

ここで竹内は造園界に対して辛辣な意見を述べている。しかし、それに続いて「此事はそのまま嘗ては建築に於て言われた事であつて、一部は斯うした過去の觀念的な傳統から脱却し、清算と揚棄と飛躍とが勇敢に行はれたのである」（竹内 1936 p.53）としている。これは大正期からさかんに議論されてきた住宅改造のことを指している。そして、先の文章は、住宅改造に対する庭園改造の必要性を述べたものであることがわかる。その上で、竹内は造園家の役割を以下のように書いている。

> 現代の造園技師は〔…中略…〕公園の市民の動線や廣場の大さ、塵埃と樹木の健康、街路樹の樹蔭に關する植栽間隔を研究課題とせよ。〔…中略…〕造園技師の分野はウインドゥ・ガーデンへ、そして屋上庭園へ、又は公園への距離へと研究發展しなければならなくなる／そして、又、工場の煤煙に傷つけらるる工場庭園の問題、共同住宅の中庭を如何に取扱ふべきかの問題、概念化された庭園から潔く訣別し、現在の社會に直接的な庭園を再び民衆の手に戻す事が使命であることを自覚して出直すだけの決斷が要求されてゐることを知らねばならない
>
> （竹内 1936 p.54）

竹内は造園家に対して社会的役割を自覚するように促している。竹内の文章の冒頭に「いづれの藝術と雖も社會の生産關係に依存する事無くして發展するといふこと、及びそれが社會進化の状態に背馳して尚且つ高位の價値を取得し得るといふことは、今日の藝術觀の上に於ては信ずる事の出來ない事實となっている」（竹内 1936 p.51）とあるように、庭園もその時代の社会との関連を無視することはできない。日本の伝統的な庭園はそれぞれの時代の支配階級の所有物であって、造園家は無自覚に伝統的な庭園に固執し続けるのではなく、近代的な市民社会での課題に対して専門的な知識と経験をもって貢献することが造園家の新しい役割であるとしている。さらに、『造庭建築』が雑誌『建築・造園・工藝』に掲載された文章から西川友孝が選んで編集していることを考えると、編集者の西川も竹内の意見に賛同するところがあったと考えられる。なお、『造庭建築』の構成は、前半に庭園関係者、後半に建築関係者の文章が集められているのに対して、竹内の文章は全体の４番目という位置に置かれていることも重要である。

４－２．蔵田周忠

蔵田周忠（1895～1966年）は、1913（大正２）年に工学院大学の前身である工手学校を卒業し、三橋建築事務所や曽禰中條建築事務所に務めた後、1920（大正９）年に早稲田大学の選科生となった。1921（大正10）年に平和記念東京博覧会の施設建設技術員となり、その後分離派建築会に参加した。1922（大正11）年以降、三橋建築事務所での先輩であった関根要太郎とともに、京王閣や多摩聖蹟記念館などの設計に携わった。1927（昭和２）年に千葉大学工芸学部（現千葉大学工学部）の前身である東京高等工芸学校の講師となった。1930（昭和５）年にはドイツに渡り、バウハウスやグロピウスなどのモダニズム建築に接し、1932（昭和７）年に武蔵工業大学（現東京都市大学）の前身である武蔵高等工科学校教授となった。『近代建築思潮』（1924年）、『ルネッサンス文化と建築』（1926－27年）、『近代建築史』（1965年）など建築史に関する多数の著書がある。

蔵田は『造庭建築』に「住居建築の根本の問題　―単一住居か集合住居か―」と題する文章を掲載し、ヴァルター・グロピウスが発表していた高層住居建築に関する研究及び提案を参考にし、当時の東京の状況を考慮して住宅建築と敷地との関係について考察している。ここで蔵田は「出來るだけ廣い自然を取り入れた住居地域の敷地内に於ける住居建坪は出來るだけ小面積であること、即ち家に比して庭園の廣いことが人間生活にとつて理想的であるに違ひない」（蔵田 1936 p.272）として、当時の市街地建築物法により住居地域では全敷地の40％が空地の最小面積であり、庭としては極めて狭小であることを問題視している。これに対して、蔵田は住居経済の問題からみて合理的な集合住居の提案を行っている。

また、蔵田は1935（昭和10）年12月５日発行のアサヒグラフ編『今日の住宅　その健康性と能率化への寫眞と解説』（写真６）のなかで「住宅の進化」と題して当時の住宅の特徴、特にそれまでの伝統的な住宅とは全く異なった形式として現れてきた新しい住宅の特徴について、西洋

と日本の住宅の変化を比較して解説している。そのなかで、当時の新しい住宅形式は「新材料を以てする全く新らしい形成であると同時に、多くの「日光と新鮮な空氣を入れる大きな開口」や明朗な室内」（蔵田 1935a p.9）を持っているとしている。さらに、同じく『今日の住宅 その健康性と能率化への寫眞と解説』のなかの「實際問題の指針」という文章において、「現在のように種々な事が専門的に研究され、或程度迄ははつきりと解明されてゐる時代としては、出來るだけその専門の研究を參考して、すべてを判断し、過去のものを新しく生かすのであつて過去のものを眞似するのではない」（蔵田 1935b p.138）とした上で、住宅と庭園の関係について以下のように書いている。

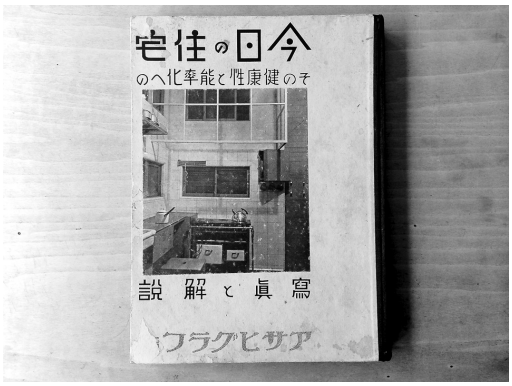

写真6　『今日の住宅　その建築性と能率化への寫眞と解説』アサヒグラフ編　1935（昭和10）年

> この庭園と家－といふよりも室内と庭園とのつながりに一工夫を要する。室から庭への移り變りといふか、連結點といふか、いづれにしても庭園が室内の延長であり、室内が庭園の一廓であるように結合すれば、住宅として眺めによく、使ふに好都合である。日本住宅は此點に就ても世界に誇るべき模範をもつてゐる事が近頃よく論じられている。〔…中略…〕右のような密接な關係から家と庭とは切り離して考へることの出來ないものであつて、家の外部ではあっても、やはり建築の設計者が設計するか、少なくとも建築家の意向が充分實現されてるのでなくてはならない（蔵田 1935b p.153）

ここで、蔵田は住宅と庭園のつながりが重要であるとし、そのためには建築家自らが庭園の設計も行うか、建築家の意向が充分に実現するようにしなければならないとしている。これは、住宅設計における建築家と造園家の連繋を重要視している造園関係者の言説と比べると、両者に意識の違いをみることができる。さらに、蔵田は従来の日本庭園がすでに完成された域に達しているのに対して「在來のままでは新鮮みを缺いて來るから、その精神の理解の上に立つて、新しく自由に考案されなければならない。即ち庭造りの定石よりも建築との對象或は調和を考へるのである」（蔵田 1935b p.153）とし、住宅の庭園は伝統的な庭園の考え方にとらわれず、建築家が主体となって住宅と庭園を対象あるいは調和を考えて一体的に設計する必要があるとしている。

４－３．古宇田實

建築関係者としてもうひとり、『造庭建築』には執筆していないが、教育者であり建築家でもあった古宇田實の文章を取り上げることにする。古宇田實は、1902（明治35）年東京帝国大学建築学科を卒業し、東京美術学校教授を経て、1921（大正10）年には神戸大学工学部の前身である神戸高等工業学校に赴任している。1929（昭和４）年から1945（昭和20）年まで同校の第二代校長をつとめた。神戸高等工業学校を退任した後、文部省文化財専門審議会専門委員を務め、杉野女子短大学長などを歴任した。また、神戸商工会議所を設計し、神戸元町商店街のすずらん灯のデザインを行った。さらに、古建築の修理監督も務めた。

古宇田は、1911（明治44）年発行の日本建築学会の機関誌『建築雑誌』292号に掲載された「住宅と庭園」という講演会記録のなかで「實際住宅及び庭園に對しては一般に興味を以て研究して行かなければならぬことであつて單りこれを専門の建築家或は築庭家にのみ委すべきものではないのであります」（古宇田 1911 p.233）と述べている。その上で、古宇田は住宅と庭園について以下のように書いている。

> 庭を造る場合は常に家と交渉し家の形式に合はすが眞意で其間交渉のないものは完全なものと言ふことが出來ない、從つて建築家と云ふ者は庭に付いて大いに研究もし、又注意を致さなければならぬが、又庭を造る人も建築に對して交渉し、又多少建築の事もわきまへねばならぬ譯であります、然るに現今の有様では建築家も庭に對しては比較的冷淡であるが、注文者は殆んど建築と庭を絶對に別物の様に考へ、そして建築の何たるかを知らぬ庭師に委任すると云ふ様であるから庭師は自分の腕一ぱい自分勝手にやると云ふことになるので甚だ間違つて居ると思います（古宇田 1911 pp.238-239）

この文章は明治末期に書かれており、橋口信助が住宅改良会を設立した1916（大正５）年より前のものである。大正期にさかんとなる生活改良のための住宅改造、さらにそれに続く庭園改造の議論以前に、古宇田は建築と庭園の連繋、さらには建築家と造園家の担当する範囲についても言及していることに注目する必要がある。

さらに古宇田は、1931（昭和６）年に発行された日本建築学会の『建築學會パンフレット第三輯第十三號　建築と關係深き庭園』のはしがきのなかで建築と庭園について以下のように書いている。

> 建築のある所に庭園在り、庭園のある所に多く建築を見る、殊にそれが住宅或は美術的表聲を持つ建築に於ては庭園は無くてならぬ附属的設備として考へらるる場合の多いのが一般である、此くて建築と庭園とは極めて密接な間柄を保ち、兩々

相提携し、相援け以て或は互に其機能と美術的價値を増大し、或は夫々の缺陥を補ひ合ふものである、故に建築家にして庭園の知識を缺くもの、また造庭家にして建築上の知識無きもの各々其技能を充分に發揮し、或は其技術を自在にすること困難だと言われても敢て過言ではあるまい

（古宇田 1931 p.1）

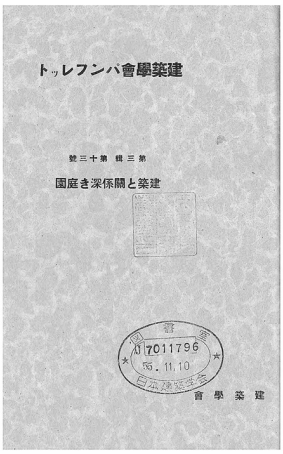

写真７　『建築學會パンフレット第三輯第十三號　建築と關係深き庭園』日本建築学会 1931（昭和６）年

ここでは建築と庭園に極めて密接な関係があり、建築家は庭園の知識を、造園家は建築の知識を持つことで、はじめてそれぞれの職能を満足させることができるとしている。さらに古宇田は、「近時の建築家で庭園について無關心の方が多いのには亦驚かせられる」（古宇田 1931 p.2）として、建築家が庭園に対して関心を持つべきであると促している。さらに建築家と庭園家の関係については以下のように書いている。

樹木が大事な部分を占め、草花園藝物が主要部に植ゑらるる庭園の築造に當て、林學者又は園藝家側から云はせると建築家ではその栽培が出來ぬからだめと云ふ理詰となる、一面合理であるが然しこれはまた他の一面からは庭園の設計を植木屋に委せろと言ふのと同じで、不合理もある、もとより林學、園藝學の智識は大に必要であるが、建築の設計が材木屋、コンクリート業者に依てなされずして、反て技術者、美術家によつてなさるると同様に庭園が古來美術家によりなされ、然かも欧羅巴に於ては建築家が最も優れたる實例を殘して居る事實に鑑み、また本邦に於ても最も發達した室町時代以來、當時の美術家たる畫家、茶人等により取扱はれたことに見て、又尚ほ其美術家は同時に多くの建築を扱つたことを思へば、如何に庭園が建築と密接なる關係にあるやも推想し得られると共に、我邦近時の庭園及公園等が建築家の手を經ること稀れなる状況に見て不思議に思はれる

（古宇田 1931 p.10）

『建築學會パンフレット』が一般向けではなく、建築の専門家を対象としたものであることを考慮する必要はあるが、ここでは建築と庭園が密接に関係していることから、庭園の設計は単に造園関係者にまかせるのではなく、造園関係者の知識を必要としつつも、建築家が建築と一体的に設計する必要があると主張している。

以上、昭和初期頃の建築関係者の本や記事から、住宅における建築と庭園の連繋、住宅設計における建築家と造園家の連繋についての言説をみてきた。この頃の建築関係者の言説には、住宅における建築と庭園に密接な関係があるということを再確認する内容が多くみられ、住宅における建築と庭園は一体的に設計されるべきであるという主張が多くみられた点は造園関係者の言説と同様である。一方で、造園関係者の言説が建築家と造園家の提携、協力が必要であるとしているのに対して、建築関係者の言説では建築家と造園家の連繋ということよりも、造園関係者の知識を必要としつつ、建築家が自ら建築と一体的に庭園の設計も行うか、あるいは建築家の意向が充分に実現できるようにする必要があるとしている。

5．おわりに

この稿では、雑誌『建築・造園・工藝』に掲載された記事を造園家西川友孝が建築家と造園家が提携、協力すべきものであることを明確に示すことを目的として再編集し、1936（昭和11）年に発行した『造庭建築』の文章の中からいくつかを取り上げ、さらにそれぞれの建築家あるいは造園家が書いたその他の文献を取り上げることにより、昭和初期の住宅における建築と庭園、および住宅設計における建築家と造園家の関係について考察してきた。

大正期にさかんとなる生活改良の動きのなかで、建築関係者による住宅改造において伝統的な日本の住宅が持っていた「自然との融和」の見直しが主張され、それに続く造園関係者による庭園改造において「戸外の室」として住宅と一体的に利用する家族本位・実用本位の庭園の提案が行われた。そのなかで、住宅における建築と庭園の連繋、住宅設計における建築家と造園家の連繋の重要性が議論されるようになった。住宅における建築と庭園の連繋については建築関係者と造園関係者の意見は同様であったが、住宅設計における建築家と造園家の連繋については建築関係者と造園関係者の意見に違いがみられた。造園関係者は建築家と造園家の提携、協力が必要であるとしていたのに対して、建築関係者は造園関係者の知識を必要としつつ、建築家が自ら建築と一体的に庭園の設計も行うか、あるいは建築家の意向が充分に実現できるようにする必要があるとしていたことがわかった。ただし、大正期中頃から造園家たちが住宅の設計まで踏み込んだ著書や記事を書いていたのに対して、古宇田實の文章からわかる通り、昭和初期頃には建築家の庭園への関心は低く、建築家がもっと庭園に対して関心を持つべきであると指摘されていた。このことから、昭和初期の住宅の庭園について建築家が主体となって設計をするべきであるという建築関係者の主張は、造園関係者による建築家と造園家の連繋の重要性についての主張や、住宅の設計にまで踏み込んだ造園家たちの著書や記事に影響されたものであると考えられる。つまり、昭和初期以降の建築家が主体となって住宅における建築と庭園を一体的に設計するという考え方は、造園家たちによる庭園改造の動きと関連しながら展開していったと考えられる。

図版出典

写真１～６　筆者撮影

写真７　日本建築学会図書館デジタルアーカイブスより

参考文献

上原敬二　1919　『住宅と庭園の設計』嵩山房　大正８年

上原敬二　1936　「住居庭園に於ける諸問題」『造庭建築』巧人社　昭和11　pp.39-49

大屋靈城　1924　『庭本位の小住宅』裳華房　大正13年

蔵田周忠　1935a　「住宅の進化」『今日の住宅　その健康性と能率化への寫眞と解説』アサヒグラフ編　pp.8-11

蔵田周忠　1935b　「實際問題の指針」『今日の住宅　その健康性と能率化への寫眞と解説』アサヒグラフ編　pp.138-154

蔵田周忠　1936　「住居建築の根本の問題　―單一住居か集合住居か―」『造庭建築』巧人社　昭和11　pp.271-286

古宇田實　1911　「住宅と庭園」『建築雑誌』292号　pp.233-243　日本建築学会　明治44年

古宇田實　1931　『建築学会パンフレット第３集第13号　建築と関係深き庭園』日本建築学会　昭和６年

竹内芳太郎　1936　「庭園の社會性」『造庭建築』巧人社　昭和11　pp.51-54

田村剛　1919　『実用主義の庭園』成美堂書店　大正８年

西川友孝　1929　『庭園工芸と室内装飾』資文堂書店　昭和４年

西川友孝　1930　『近代的な小住宅』資文堂書店　昭和５年

※1936（昭和11）年　文教堂より『近代的な住宅と小庭園』として再版

西川友孝　1936　『造庭建築』巧人社　昭和11年

西田富三郎　1934　『新時代の庭園と住宅』巧人社　昭和９年

参考論文

足立裕司　1986　「「所謂日本趣味」の一系譜に関する考察　―古宇田實と旧神戸商工会議所について―」『日本建築学会大会学術講演梗概集』昭和61年８月

市川秀和　2001　「大正期における田村剛のモダンデザイン思考と庭園改善運動」『ランドスケープ研究』日本造園学会

市川秀和　2004　「田村剛による実用主義庭園から庭園改造、国民庭園への変遷　―大正・昭和戦中期の造園界にみるモダニズムとナショナリズム」『福井工業大学研究紀要』

笠原一人・武田憲人・古山正雄　1999　「1910年代から1940年代までの日本における建築と庭園を巡る言説についての考察」『日本建築学会近畿支部研究報告集』平成11年度　pp.961-964

齋藤英一郎　2006　「近代建築家による日本式庭園研究の系譜とその特徴　～著作・雑誌にみる建築界と造園界の交流～」『日本庭園学会誌』14・15号　pp.15-22

清水正之　1997　「論客大屋靈城　初代の緑の都市計画家」『ランドスケープ研究』VOL.60　NO.3　日本造園学会　pp.203-206

田中栄治　2006　「雑誌『建築と社会』にみる戦前の関西の住宅　―阪神間のモダニズム住宅　その２―」『神戸山手大学紀要』第８号　pp.105-118

田中栄治　2007　「雑誌『住宅研究』にみる大正期関西の住宅　―阪神間のモダニズム住宅　その３―」『神戸山手大学紀要』第９号　pp.97-108

田中栄治　2009　「雑誌『新建築』にみる大正から昭和初期の関西の住宅　―阪神間のモダニズム住宅

その４―」『神戸山手大学紀要』第11号　pp.61-72
田中栄治　2012　「大正後期から昭和初期の関西の住宅における庭園の役割　―阪神間のモダニズム住宅その５―」『神戸山手大学紀要』第14号　pp.33-55　2012.12.20
田中栄治　2013　「大正後期の住宅における庭園の役割　―大屋霊城『庭本位の小住宅』より―」『神戸山手大学紀要』第15号　pp.29-46　2013.12.20
近田哲也・大川三雄　1999　「大正・昭和戦前期における住宅庭園の近代化に関する研究　―庭園改造運動（1919～1944年）における提案を通して―」『日本建築学会大会学術講演梗概集』
西村公宏　1989　「大正後期から昭和初期にかけての住宅競技設計における実用庭園について」『造園雑誌』
藤木竜也・小池僚子　2013　「明治～昭和戦前期建築系雑誌における住宅関係論考掲載推移に見る「住宅庭園」について　近代日本における「住宅庭園」に関する研究　その１」『日本建築学会中国支部研究報告集』第36巻　pp.871-874
藤木竜也・小池僚子　2013　「明治～昭和戦前期建築系雑誌掲載図面に見る「住宅庭園」について　近代日本における「住宅庭園」に関する研究　その２」『日本建築学会中国支部研究報告集』第36巻　pp.875-878